

## 学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

研究 0-1

1. 医学部・医学系研究科

研究 1-1



学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
医学部・医学系研究科	期待される水準を上回る	期待される水準にある	改善、向上している



**医学部・医学系研究科**

I 研究の水準 ..... 研究 1-2

II 質の向上度 ..... 研究 1-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点 1-1 「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 英文原著論文数は平成 21 年度の 346 件から平成 27 年度の 410 件へ増加している。
- 科学研究費助成事業の採択状況について、第 1 期中期目標期間（平成 16 年度から平成 21 年度）の平均 134.5 件（約 3 億 3,000 万円）から第 2 期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）の平均 214.2 件（約 4 億 9,800 万円）へ増加している。
- 受託研究の受入状況について、第 1 期中期目標期間の合計 181 件（約 14 億 7,700 万円）から第 2 期中期目標期間の合計 417 件（約 25 億 6,500 万円）へ増加している。

以上の状況等及び医学部・医学系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

### 分析項目 II 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点 2-1 「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に神経生理学・神経科学一般、精神神経科学の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、神経生理学・神経科学一般の「トニック GABA 作用による自閉症・てんかんモデルの神経症状への関与の証明」、精神神経科学の「自閉症における脳内環境異常の描出」がある。そのうち、「トニック GABA 作用による自閉症・てんかんモデルの神経症状への関与の証明」は、アンジェルマン症候群の運動障害が、GABAA 受容体の  $\delta$  アゴニスト（Gaboxadol）の投与によって改善することを明らかにし、研究成果は医化学一般分野のトップジャーナルに掲載されている。
- 社会、経済、文化面では、特に神経生理学・神経科学一般、解剖学一般（含組織学・発生学）の細目において卓越した研究成果がある。

- 卓越した研究成果として、神経生理学・神経科学一般の「トニック GABA 作用による自閉症・てんかんモデルの神経症状への関与の証明」、解剖学一般（含組織学・発生学）の「質量顕微鏡の開発」がある。そのうち、「質量顕微鏡の開発」では、「質量顕微鏡」の企業との共同開発により、平成 27 年度瀬藤賞を受賞しているほか、マスメディアで当該装置が紹介されている。

以上の状況等及び医学部・医学系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、医学部・医学系研究科の専任教員数は 215 名、提出された研究業績数は 49 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 46 件（延べ 92 件）について判定した結果、「SS」は 1 割未満、「S」は 6 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 16 件（延べ 32 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 5 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## Ⅱ 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 科学研究費助成事業の採択状況について、第1期中期目標期間の平均 134.5 件（約3億 3,000 万円）から第2期中期目標期間の平均 214.2 件（約4億 9,800 万円）へ増加している。
- 受託研究の受入状況について、第1期中期目標期間の合計 181 件（約 14 億 7,700 万円）から第2期中期目標期間の合計 417 件（約 25 億 6,500 万円）へ増加している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間において、医療機器の承認・認証を5件取得し、内視鏡手術用ナビゲーションシステム等の製品化を行っている。また、光技術や分子イメージングについて研究成果をあげているほか、機能強化施策により共焦点レーザー顕微鏡システム等を整備し、細胞から動物個体までのあらゆる階層を対象に光技術や分子イメージングの研究を推進する体制を構築している。
- 濡れたままの状態でも電子顕微鏡による観察を可能にする技術は、複数の分野で活用される可能性が見込まれ、基礎医学、臨床応用へ展開可能な研究成果となっている。
- 「質量顕微鏡の開発」では、「質量顕微鏡」の企業との共同開発により、平成27年度瀬藤賞を受賞しているほか、マスメディアで当該装置が紹介されている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。